

株式会社 IMAGICA TV 第7回番組審議委員会議事録

開催日： 2010年11月25日(木) 10:30～12:00
開催場所： 東京都港区白金台三丁目19-1 株式会社 IMAGICA TV 内 会議室
委員の出席： 委員の総数 7名
出席委員数 5名
出席者：

放送番組審議委員	放送事業者
小倉 紀行	伊藤 明
植田 敬三	山本 雅史
横田 栄三	草野 雄次
犬養 亜美	野村 憲一
小倉 茂	松田 健吾
	小瀬 朋子
	高野 佳彦

欠席者：

放送番組審議委員
朝比奈 暁美
石川 俊之

(以上、敬称略)

議題：「洋画★シネフィル・イマジカ」、「食と旅のフーディーズ TV」および「歌謡ポップスチャンネル」の番組内容、編成内容に関する審議

配布資料：上記各チャンネル10月～12月プログラムガイド
各チャンネルメディアプロフィール

審議内容：

- ① 開会挨拶、「洋画★シネフィル・イマジカ」BS委託放送免許認定のご報告、最近の市場環境についてのご説明（伊藤明より）
- ② 各チャンネル編成担当より活動方針、編成方針の説明
- ③ 各チャンネルの番組、編成に関するご意見

『食と旅のフーディーズ TV』について

<編成より>

- ・ 前回の番組審議委員会にて7月からの改編に関する方針を述べさせていただき、

忌憚のないご意見を頂戴した。今回はその経過を踏まえてご報告させていただくと共に今後に関するご意見を賜りたい。

- ・ 「食の総合エンタメ」を目指した改編の中で、大きな施策として韓流ドラマ、映画といったエンターテインメントソフトを組み入れた。それによっていくつか成果があった。「食の専門チャンネルが何故韓流ドラマなのか?」「がっかりした」等批判的な意見もいただいた反面、「こんな番組が見たかった」というサイレントマジョリティーであったであろう層からの具体的な要望を引き出すことができた。
- ・ そういった意見を広く集める為にモニター制度を導入し、継続的な視聴者との会話ができる環境を作っている。
- ・ 30代、40代の女性からは「好きなスターを見るために韓流を見るが、その後のレシピ番組も夕食の献立を考える為に見る」などの意見があり、また、料理初心者の男性が「B級グルメ」などを見て料理に興味をもったり、従来ターゲットではなかった層がこれらは「エンタメ化」によって潜在視聴者を呼び込めた例だと考えている。
- ・ 「彦摩呂のB級グルメ天国」「みうらじゅんのマイブームクッキング」といった自主制作番組が育ってきている。「みうらじゅん」は日経新聞等の媒体で取り上げるなど、パブリシティ効果も高く、各方面から応援をいただいている。「B級」についてはおかげさまで1周年を迎え、今年は「B-1グランプリ」の現場取材をおこなうなど、草の根的な宣伝ができてきている。
- ・ 改編にあたっては編成として悩みも多かったが、とにかく見に来ていただくことでいろいろなご意見をいただくこと、いただいたご意見を自主制作という強みを持ってお応えしていくことを大事にする、ということが我々なりの答えだと考えている。
- ・ また、今回は購入番組ではあるが「総合エンタメ」をより強化するものとして、「食育」「農業」というものを切り口として、子供と一緒にした農業体験や、農業に取り組む若者をフィーチャーしたドキュメンタリーなどをラインナップしている。

<ご意見>

- ・ 「みうらじゅん」インパクトはあった。
 - Twitter を並行して始めたが、番組前後のリアルな書き込みが相乗効果を生んでいると実感している。
- ・ 今回の改編によって視聴者数が増えた、といった目に見える効果があったのか?
 - 接触率は微増、視聴時間もドラマの影響で増加、ただ視聴回数は横ばい。回数の減、については料理の CH と認識している人たちが回避している、という可能性もある。プロモーション的にも派手なものを押す、という傾向になってしまっているの、従来のレシピ系を求めている視聴者には辛いかもしれない。
- ・ 今でもバラエティ化については個人的に反対。ただ、実際に数字がそのように動いているのであれば、良い方向なのか?とも思う。放送時間帯や回数など、編成上の考慮をしていただいて、母屋を取られないような配慮はぜひして欲しい。
- ・ How To Cook の実用的な部分から、料理ができない人でも見るという番組に変わっていったな、という印象。そういう人たちが「食」に入っていくことが大事。その意味で「みうらじゅん」は全く料理ができない、できなくてもいいんだ、という切り口から入っている面白さがある。

- ・ 「畑のうた」は、20代30代の女性にとってはある意味あこがれの生活、という側面がある。今までの視聴者ではない人たちが入ってくる入口を作った、という意味合い。
- ・ 「畑のうた」は、今こういう生活をしている人がいる、ということにびっくり。何かを得るために何かを捨てている。フーディーズの中では新しい切り口として近年になく面白い番組。
- ・ 基本、民放地上波が嫌いでCSに流れてきている自分のような視聴者からすると、「みうらじゅん」はある種民放化した企画ではあるのだが、客観視するとあの企画を立てる意味がわかる。
- ・ この10年ほどは、料理番組というのは教養番組からエンタメ番組に明らかに変化している。エンタメもだんだん大衆化している。一般のテレビの中でははっきりとその傾向があるので、FTVもその影響を受けざるを得ない。
- ・ カルチャー番組として筋を通すのはいいが、その狭くなった範疇にこだわるよりは少し範囲を広げていった方がよい側面もある。
- ・ 「デイリーキッチン」が番組表上ずっとつながっているような時期は相当苦しい時期だったと思う。料理家の名前を見ても料理の個性まではわからない。その当時からすれば一時の苦境を脱しつつはあるのかな、という印象。
- ・ 番組の内容が全体的にレベルアップしたと思う。購入番組もそうだが、制作番組である「みうらじゅん」も非常に身近に感じるもの。「これ、放送するのか？」と思うようなもの、でもそう思いながら見てしまうような番組。好き嫌いはあるだろうが。
 - あの番組の制作にあたっては、覚悟が必要だった。包丁の持ち方も、おたまの名前もわからない、という前提での番組作り。意外と、フーディーズのコア視聴者も許容してくれている。ハナから「あれは料理番組じゃない」と思って見てくれている。長髪、サングラスという容姿に「不衛生」などというご意見もいただくが、そう言いながらも見てくれている。
- ・ あの企画の面白さはひとえにパーソナリティとゲストのマッチング。それに尽きる。料理をする、ということは添え物で、そこで語られるトークが全て。
 - 実際にゲストを求めて番組を見るという状況。高見沢俊彦がゲストの回はアルフィーのファンがたくさん見ていただいて、ご意見も多数いただいた。
- ・ ローカリズムとグローバリズムの両方を包み込むようなものを作ってほしい。世界が複雑化してきて、対立、差異、格差、違いといったようなものが昔以上に意識の上に上がってくる。フーディーズはどちらかといえばグローバリズムに重点を置いて、さまざまな世界の違い、発想の及ばないものの紹介をしていたように思うがどちらか一方にかたよることなく、ローカリズム、日本の足元を見つめるものにも意識をしてほしい。

◆ 『歌謡ポップスチャンネル』について

<編成より>

- ・ CATV 契約局数が伸びている。前年比 1.6 倍の局数。高齢化社会に必要なもの。
- ・ ジャンル比率 → 演歌歌謡曲 70% 懐かし音楽 20%、その他 10% この比率は従前から変わらず今後も維持。
- ・ 懐かし系の需要が増加傾向。

- ・ 番組種類 演歌コンサートを必ず月 1 回。特に HD 収録のものを取りそろえている。美川憲一、川中美幸、五木ひろし、八代亜紀などは自社収録。
- ・ 舟木一夫などは購入番組で放送、自社制作のものとの印象の違いなどご意見賜りたい。

<ご意見>

- ・ 「Age Free Music」の加藤登紀子の回は非常に良かった。「100 万本のバラ」のルーツやヒットに至る過程などが垣間見えて非常に面白かった。
 - 今までで一番長かったのは植村花菜の「トイレの神様」8 分半・・・ポリシーとして絶対に端折らない。樋口了一「手紙」も 7 分半。詩がすごく良く、画面に全て出すことでそれをアピール。
- ・ 感謝デーの無料放送の際に「八代亜紀コンサート」を露出したことがとても良いことに思う。けちらずに目玉を見せることが視聴者をひきつける。
 - 審議会にてご指摘いただいたことの実践という部分。けちらずに目玉を見せることが視聴者をひきつける → 見てもらう機会を作らないと分かってもらえない。
- ・ パーソナルスタイルの形式というのは本当に貴重。民放、NHK ではせいぜい 1 曲か 2 曲、それもフルコーラスではなく端折って使う。歌謡番組はいつから大勢が出てきてちょっとずつ、というバラエティ番組化してしまったのか・・・
- ・ コン서트形式のものを 90 分も放送するというのはよほどの大歌手でもなければ、今や TV 局の経営上成立しないのか。とも思う。
 - この番組の発想の原点はカラオケ雑誌。歌い方、レッスンの類が必ず載っていて、譜面や CD が付いているのだが、意外とご本人の持ち歌を、というものがなく、TV でやればご本人も観る方も喜ぶのでは、というところから。
- ・ 舟木一夫などは、最近あまり露出がある方ではないが、じっくり聞くと、この方は演歌ではない。ロックでもない。抒情歌、青春歌謡の延長。こういった音楽をご高齢の方がしみじみと聞く、ということはコンサートスタイルでないと成立しない。歌手の方も自己主張できる場はコンサート。同様の形式はこれからも続けていってほしい。
 - 他局ではなかなか成立しない。スポンサーも付かないので。だからこそ、そういうジャンルは続けたい。
- ・ 昔のヒットパレードなどに出ていられた方たちが、コンビやトリオを組んで活動されている。こういった方たちを取り上げることは可能なのか？「3 人娘」など。団塊の世代としてはぜひ見たい。
 - 川中美幸さんなどは、歌うことは息をしているのと同じ、という表現をされる。歌うために生まれてきた方、というのがいるんだなあ、と思う。
- ・ 「八代亜紀コンサート」では、昔の売れなかったころの歌を歌っているのが面白い。野外コンサートの、まだ陽があるところに始まって、陽が落ち、夜になって、という、映像としての面白さを感じられるところが良かった。
 - 野外コンサートの場合はそういうセッティングが多い。夕暮れで証明に灯が入る 1 番いいところを使う、ということ。八代亜紀の場合は誕生日コンサートでもあったので。夏の暑い盛りだったので、お客さんに何かあったら、というのが一番心配だった。救急車は 3 回来たが、みなスタッフが運ばれていた。

- ・ インタビューがまたよかった。インタビュアーの邪魔や時間の制限がなく、密度の濃いものだった。
 - 当社制作プロデューサーのポリシーでもある。コンサートに限らずご本人の語りを必ず入れていくという意味をもってやっている。
- ・ 「Age Free Music」は、富澤一誠さんは前の番組方がリラックスしているように思う。
 - 前はライブハウスの収録、今回はバーチャル。また、今回はゲストの歌もあり、というシチュエーションの違いが影響しているかも。
- ・ 「Age Free Music」進行の山本モナは、日本語が聞きやすく基礎がしっかりしていて安心して見ていられる。
 - 進行役として必要なポジションだが、音楽番組においてはこのポジションは非常に重要。キャスティング時点で非常に悩み、今でも常に悩んでいる。

◆『洋画★シネフィル・イマジカ』について

<編成より>

- ・ 今年は大きな活路を見出した1年。
- ・ 世界の名画を紹介するチャンネルとして、特にヨーロッパの名画などを幅広く紹介している唯一のチャンネルであると自負している。ただ、視聴率などの視点ではヨーロッパ映画は難しい、なかなか観ていただけない現状に対する悩みもある。
- ・ 欧州女優図鑑をスタートしたが、非常に好評であった。「ひまわり」は主演のソフィア・ローレンが高松宮殿下の世界文化賞受賞という追い風もあり視聴率も取れ、その他のヨーロッパ映画もようやくきちんと観ていただけるようになってきた。
- ・ 出し方、切り口にこれからも工夫が必要という認識。
- ・ 現在、直接権利買付、HD化を進めている。ヨーロッパの女優さんは今見ても非常にゴージャスできれいでいらっしやるので、ハイビジョンがよく映える。
- ・ 「シネフィル名画座」の枠でいわゆるクラシック名画をHDで放送している。
- ・ 10月からはマカロニウェスタンを連作で放送中。西部劇のエッセンスを凝縮させつつ、イタリアならではの軽さも楽しめる。
- ・ 今後はヨーロッパならではの歴史劇などのジャンルも手掛けていきたい。
- ・ これらのラインナップ、映画の選定という視点からのご意見をたまわりたい

<ご意見>

- ・ ゴダール、いよいよ 楽しみ。ゴダールをこれだけやってくれるというのはなかなかない。
 - 以前からシネフィルといえばゴダール、という定評はあった。ただ、今回は計10作品。これだけラインナップをそろえたのははじめて。今回ハイビジョン化されている。非常に色を使うのが上手な監督なので、ぜひ録画してみたい。
- ・ アップルTVを買ったのだが、ラインナップもまだまだで、そこから比較するとシネフィルは非常に贅沢だな、とあらためて思う。
- ・ マカロニウェスタンは懐かしい気持ちで見られた。70年代あたり地上波でやっているころは「またやってる」という印象だったが、2010年に見ると新鮮な感じ。

- ・ ジュリアーノ・ジェンマが少し好きだった。かつては主役にばかり目がいていたが、今見ると脇役の方に目がいくようになった。ロベルト・カマルディエルなどを見て、なんておもしろい役者なのか、という発見があり感謝。これも放送されて見る機会があればこそ。
 - 古かろうがネガが残っているので、現代にいくらでもきれいにできるのが映画の良いところ。ハイビジョンもいいが、映画ならではのブチブチと入るノイズもまた映画らしい面もあるが。
 - 今年は女優押しだったが、来年に向けては「いい男押し」を企画していて、アラン・ドロンを10作品揃えている。以前お話しした通り、日本の配給会社はヨーロッパ映画を買わなくなってきた。
 - そういったこともあり、当社で権利を直接買付している。
 - そのため、放送だけでなく、DVDパッケージで出す、劇場配給するなどの多角的な露出ができるようになっている。BBやアラン・ドロンなど。
- ・ BS2あたりでも監督や俳優で特集しているが、2〜3本しかやってくれない。ただ、その中でもやはりいいラインナップを持ってきている。
 - 本数ならシネフィルは負けないが、予算上の制約などもある。
- ・ 歴史劇というジャンルはぜひ見てみたい。
- ・ 映画制作上、いわゆるオリジナルものというか全く創作のもの、原作があるものというものの差などを「浅研」あたりで取り上げてもらえないか。「エデンの東」など、原作も読んだが全く違う話になっている。スティーブン・キングの「シャイニング」なども原作とあまりにも違って、作者が映画会社を訴える、という話があったくらい。「スタンド・バイ・ミー」などは原作に忠実に作られている。
- ・ 日本では原作に忠実でないと、というような暗黙のルールがあるように思うが・・・向こうは映画は別物という概念があるのか、全然別のもの。
- ・ 「エデンの東」などはどちらも名作なのだが。「日の名残り」「指輪物語」なども小説では大事なプロットが映画だと抜け落ちている。
- ・ シネフィルの特長は短編映画。普通では見られない映画にシネフィルでは出会える。
 - 年末に、今年放送した中でのベストショートを特集する。これはやはりシネフィルならではの。ただ、短編映画を実際に見ていただくのはなかなか難しい。工夫が必要。
- ・ BSへの進出についてはいろいろご苦労もあると思うが、現状に対して自信をもって取り組んでもらいたい。

以 上